一九五六年

千曲會報

第五四号

昭和三十一年三月二十三日印刷
昭和三十一年四月一日発行
信州大学繊維学部内
編集兼発行人　小山長雄
印刷人　上田市原町　中沢正
印刷所　信大繊維学部内　中沢印刷株式会社
発行所　社團法人千曲会

（定価1部15円也）

若返り考

賛助員　石倉　新十郎

(一)

新年紙上で総会記事を一覧し、母校愛溢るゝばかりの様子を知つて、老骨の私ですらうたゝ歓喜に浸される思いである。人々の意見は何れも胸を打つものばかりで、云う所は皆真実である。そして結局意見の一致がない。此処で此際誰もが共に一考する事を促したい。様々の意見を聞かされたが論者の心中は要するに母校も千曲会も曾て盛んであつた昔の様に復活させたい。即ち若返らせたい希望は一致している様に見える。

世間を見るに千曲会総会ばかりではない。老年、中年、青年を併せ含む団体で何か事を総合統一しようとする時に必ず出会うのはこうした問題の困難である。こうした困難を除くには是非会員の各々がおのれを省み他の正態を察する必要がある。そうして相互の理解を得ればよいのである人を老年と青年とに二分して相違の要点を考えて見る。老年の者―衰弱の体軀、多くの経験、高度の常識、自重、意気沈。

青年の者―旺盛の体軀、少ない体験、未熟の常識、勇敢、意気昂。

斯様に殆んどが正負の相違で一致し得るものは意気だけである。

活動の意気盛んな事が若さであり、之を喜ばない者はない。有機体が若返るには全員の意気が昂揚され、各々が応分に特質を以つて努力奮励すればよいのである。努力とは社会的信用、財力、常識、体力等を提供する事である。然るに世間一般では会組織から平等観に捉われて一定形の義務負担で運営する事になつている。これが総合統一の事に論議紛乱を来すゆえんであるそこで先ず千曲会の若返り方の問題だが、今年度予算を見てはうたゝ哀れを禁じ得ない私は今老後の奉公で東京はずれ街の町会の手伝いをしているが、町内の消防設備改造費二〇万円は最低木炭代額の寄附でたやすく出来上つてしまつた。千曲会の年四〇万円位は有力卒業者数人の小遣節約で弁じられそうに思われる。泥にはまつた車輪にさえ一寸挨拶をして行く人に手伝いを頼むのが世間の普通である。会の理事者から親展書をもつて依頼状を出す位は何でもない事ではないだろうか。先立つものは金である。次はもつと会報出版回数を増し、記事を選んで会全員の意気昂揚を促す事が先ず決行さるべき仕事であると思うのである。

我が校は生れてやつと
五十年
道誤らず常に若かれ
うるわしき其水上を
護りなん

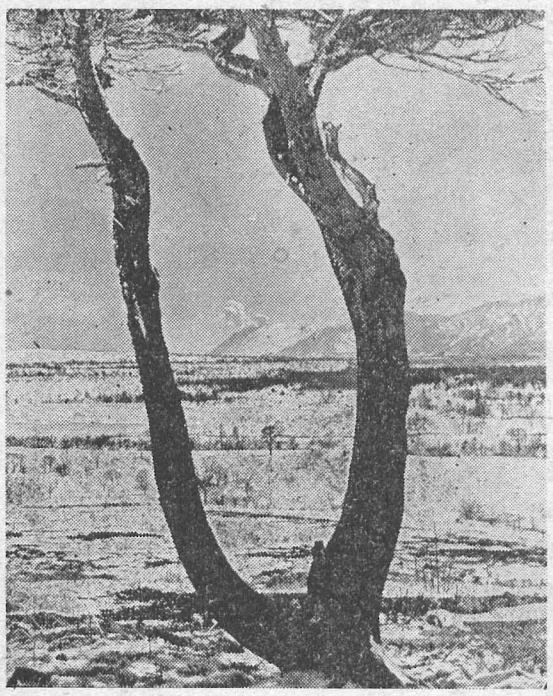
千曲の流れとはに変らじ

(二)

誰しも我家故郷をなつかしまない人はない様に、自分の生い立つた学校、殊に世に出る時の母校に対しては愛着の情が心にひそんでいる。之は人の美しい詩情である。社会人になるとこの詩情だけではなくなつて、社会生活が出身母校と縁の有る事を痛切に感ずる人も現れてくる。

社会的に良い境遇に会う人は母校への関心が年と共に薄くなり、好ましくない境遇に永く閉じこめられる人は母校の魅力にすがろうとするのが人情である。卒業生の母校愛にはこうした詩情と依頼感が含まれている事を確認していなければなるまい。

我校も古くなつて職員が入り代り成り変り、卒業生もこう多数となつてはそう面倒を広く見てやれなくなり、必然学校から千曲会に肩替りしてもらう情勢になつて来た。だが数多い支部があつてもこうした世話をする余裕もなく、機能もない。今の状態では気の毒ながら母校に止まつている職員に負担してもらい、千曲会自体は無力に近い有様である。さてこうした現情勢下で若返りの道は何処に有るだろうか？　若返りは老変した有機体を新鮮化に導く事である。一朝にして実現し得るはずはない。学校も千曲会も共に携えて若返らなければならないのである。



早　春

菅平ダボスより浅間山を望む

若返りしている実例を一つ挙げてみよう。今では東大の工学部すらしのぐ勢いの東京工大はもと蔵前にあつた東京高工の昇格したもので、卒業生の就職率は最高をたゝえられている。其の同窓会は蔵前会と称して、先輩には実業界の有力者が少くない。会の運営資金はこれ等の寄附金と会館の営利経営で賄い、会員の会費を力あるたよりとはしていないらしい。

我校を見ると不幸にも戦争に出あつたが、昇格されてからもう十年創立以来五十年にもなろうとしているのに余りにも大体が旧態であり過ぎる専門研究教育の実績にどれだけの新しさがあつたのか？有為の学者を集める事は一体誰がしなければならないのかを考えれば良い。

東京工大を今にあらしめたのは文部省ではなかつた。それはバックの蔵前会の力であつて、その中心は少数の先輩財界、学界の有力者達の協力であつた。一つの団体的力を発揮しようとするのに組織の平等負担だけで出来た験しはない様だ。応分の負担が真の平等である。財ある者は金を、信用ある者はその信用を常識高い者は常識を提供する斯様に勝れた特徴のある協力で出発出来るのである。偏見は各々慎しむべきである。

我が校及び千曲会の若返りは会員中から勝れた特徴を持つた有力の人に出てもらつて其の人達の協力によつて出発するよりほかに道はないではないかと思われる。

それぞれに各細胞は即応す
乱れある時は
我が身は病めり

（三）

人は自分の病気を自覚しない限り日常生活を衛生的に改めようとしない。又気がついても其の実行には相当に困難を感じて思い切つた努力を要するのである。家庭ですら家族の者が必ずしも思う様に一致してくれず、事柄によつては改めたくも事実不可能に陥るのである。

千曲会の様な社会的有機体であると、ことに民主的な現時で会の若返りの様な難問題を相談された所で、誰もがしりごみするのは人情であろう会員の中めぼしい有力者とあれば、もう相当の年輩であり自重心が強くなつているからこうした難問題の事で動かすのは極めて困難であり殆んど承諾不可能であろう。

然しこうした先輩でも愛校精神は有るのだから多数会員の熱烈な意気が示されゝば必ずしも動かないとは限らない会員老若先後を問わず一致した旺盛の意気が原動力でありこの意気が鋭く昂揚してくればその気勢が各方面に影響を及ぼして、若返り斡旋の有力者を助け実行を容易にさせる情勢に推移させるのである。何をするにも意気盛んに気勢を高めるものは青年、中年の会員達で有る。千曲会各支部にはそれ〳〵多数の此等会員がおられるのだから、此等の人達が中心となつて先ず気勢を揚げ有力者を動かすのが若返りに突進する第一歩で有る。そうしてこうした熱意によつて動かされた有力先輩が初め少くても、そこに協力が始まれば既に前進の第二歩で有ると云え様。此処迄に至れば学校も千曲会自体も依然たる旧態に止まり得る筈はない。先ず学校が若返りに動き出せばもう功を奏したと云うべきだろう。あと千曲会の若返りは其の間に自らすでに成り立つているだろう。衷心より望んで止まない事は千曲会全員老若を問わず此処に奮起されたい事である。

火は立ちぬこぞりて共に
燃きなん
其光明に世を援くべく

× ×

アッサム州（印度）便り

十二月十八日発　湯原淳

冠省　去月十五日羽田出発無事当地に着任アッサム州政府工業顧問として目下活動中に有之他事ながら御放念賜度候。

当地はかつて皇軍の進駐の所インパールは当州に属する故近く現地に行つて見たい様に考え居り候。このインパール地方は皇軍の進駐帰国者の話によると、非常に悪い様に話がありたるが、こゝの連中の話しによるとHealthy place との事に候。

今政府の有る所はかつて英国の統治せる時のまゝの所で五〇〇〇呎の高所にあり非常に涼しいし、以前コイソール州に居りし時と住民の生活様式も異り印度の大きいのにも驚き申し候。この附近全山松の林にて枝下十間又はそれ以上もあり、住宅も日本式建方にて内地の何処かに（軽井沢の千ヶ滝）居る様に感じ申し候。

到着早々繭乾燥機の設計、並びに絹紡工場の計画書提出をせかれた為つい御無沙汰申し候共、一応取纏め中央政府の裁可をまつ様に相成り、小生の計画書を中央政府に持参し其の帰りたる報告によると裁可決定との事にて又多忙に相成ると思居り候（その絹紡工場は約四億円を計上）。その他地方産業発展改良の経費として三十七億余の邦貨にしたる金額を注入の予算決定との事に候。

絹紡工場の原料はエリ蚕並びにムガ蚕繭にて、充分集荷も容易にて家庭工業の分も充分あり候。その他目下試験場にて家蚕の試育も好成績を収めつゝ有り候。家蚕はカシミール州が多分一番良いと思われ候、山林資源も沢山あるが運搬その他動力の問題にてのびなやんで居た様子なるも、ベニヤ板工場の機械は独乙より輸入して発足の寸前のものも有之候。

当アッサム州は米の産地にて米は至る所に沢山有之候、その他野生の動物は御承知の印度サイ（一本角の所有者）が居り、数日前仕事の都合上出張の折象の背中で見物して参り候。その他の動物は象、トラ、ヒョウ、野性の水牛、蛇は相当大きなものが居り、又ゾウ、も大きいのが居り申し候。未だ到着早々にて様子も良く判りませんが、とりあえず近況申添得貴意申し候。

二伸

当アッサム州は、ダッサは無く柞蚕はビハール州に沢山産出する事が判り申し遅れ御申添候。

又養蚕科の先生方が研究試料として野蚕の卵が必要の時は御用命賜われば手配仕る心組に居り候。（紡七　卒）

From MAKOTO YUHARA
Do Peak hotel
SHILLON
ASSAM-STATE
INDIA

支会通信

農林省蚕糸試験場便り

堀内彬明

当蚕糸試験場本場には、松村孝美先輩以下二十三名の多数の千曲会員が在職しており夫々の分野で活躍しているが太郎山麓で共に送つた青年時代の結び付きにより毎年春と暮に盛大な懇親会が催され、いつも殆んどの会員の出席を見、互に激励しあつている。

去る十二月四日開催された忘年会は例年以上の盛大裡に進められた。と云うのは母校の山口先生および支場長四名の御出席を得、総勢二十五名の五時間にわたる大宴会になつた為である。

先ず今夏レバノン国に招聘出張された竹内好武技官の、天然スライドによる旅行談、山口先生の母校のお話、互の実験の話、先輩の親気になつての御忠告、互の啓蒙等々同じ職場にありながらよくもつきない話々……

卒先松村先輩の〝かくし芸〟が披露されるにおよび臍を片付けて次々と大熱演、老若四十年のへだたりを忘れ和気あい〳〵の内に時間のたつのも忘れ楽しい時を過し最後に校歌を斉唱解散した。

（蚕三三回卒）

寄書註

SM は松村孝美氏（蚕一）
M² は竹内好武氏（蚕三）
好武 は水出道男氏（糸三）
BITOは尾藤省三氏（蚕10）
金六 は佐藤金六氏（糸六）
danchoは外出善臣氏（化五）
A、I、は出浦　東氏（蚕三）
asano は浅野清志氏（蚕三）

會費を納めて下さい

最近本会の会費の納入状況は会員各位の御協力により大変良くなつて参りました申す迄もなく会費は本会活動の原動力となるものであり、尚千曲会報も毎月発行を試行中でもありますので一層の御協力を御願い致します。

茨城支会のプロフィル

加藤省三

本会が年とともに発展また発展はまことにうれしい限りである。各支会もそれぞれ大いに活動が展開されているようだ。

わが茨城支会も本会後援のもとに日ごとに堅実なあゆみを進めてきている。これひとえに名会長、名副会長を推しているからであろう。

さる日(昭三〇・一〇・一六)水戸での支部総会に本会から御出席をえられなかつたことがなにより残念であつた。これは支会幹事の大失策とでも言いましよう。今度こそはと願つている。

さて、まえおきはこれ位にして早速本支会各大人の横顔を御紹介しよう。

○船後勇平（蚕5）　本支会長で先年は本県蚕糸課首席技師から友未知事のお眼がねに叶つて、地方事務所長として昨今まで大活躍され県会議員立候補の噂までのぼつた大先輩。タイプは代議士級。現在退職されて太陽熱利用の生活改善普及会で県下に拍車をかけている。（水戸在住）

○本間　久（糸8）　終戦前までは各地で繭検定所長など歴任し、官吏道の甘いからいを味つてから現在退職されて、風光明眉の本県久慈川のほとりに愛妻とともに農村社会の指導にあたつている。大公望は同氏の自営ぶりをうかゞつて若鮎をどうぞ沢山収穫されたい。（久慈世喜在住）

○丸山十吉（蚕12）　現在石岡第一高等学校に奉職蚕業主任として大活躍で仲々の斗志。校長も時々同氏には一本参えるそうだ。石岡一高校の古参級、そろそろ校長になつてもよいと思うが

○前沢康雄（蚕14）　副支会長として活躍している。高校長としての経歴は立派なもので、県下農業高校長中ではカップクは第一人者。堂々たる体軀は大学校長らしい。頭は大分白くなつたようだが、美男子には変りはない。タイプは正に満点というところでしよう。（笠間町在住）

○竹内博雄（蚕19）　上郷高校教頭として大活躍。名教頭ぶりには部下教員は絶対的で校長よりも信頼度は高いと言われている。文部省指定学校と農林省指定学校の二重の責任を一手に引受けているあたり、まさに校長級である。彼の大役も近く実のつてその手腕が買われる時が来るであろう。（豊里町在住）

○堀川　収（蚕20）　笠間高校の教頭として堅実なあゆみをたどつている。前沢先輩校長も大分気楽であろう最近は先輩校長に似てメキメキ肥つて来たことには驚いた。多分金も教頭級にふくれて来たことであろう。期待は大である。（笠間町在住）

○渡辺嘉博（蚕22）　筆者の隣組の高等学校に勤務しており、農場主任様として学校の重鎮。最近はメキメキ農場経営の実績をあげて来たので隣組の当校では弱つている。彼の推進力こそ近い将来は茨城県に渡辺校長が生れるであろうと期待している。（谷田部町在住）

○生天目久平（蚕25）　全国第一の大世帯である水戸農業高校に勤務し、繊維農業科の主任様で、温情家であり、また愛妻家である。彼は不言実行型で校長から信頼は絶対である。早朝久慈川べりからの通勤は仲々大変のようだが、近い将来は水戸農業校の農場主任様の夢は遠くはないと思う。（水戸市在住）

○谷沢　衞（蚕26）　健康も回復されて立派なタイプとなつた彼は現在自営という農村指導者である。そろそろ学校関係の職場に勤務を望んでいる。どこかに立派な花むこをむかえるところがあつたら是非彼をむかえてもらいたい。（水海道在住）

○塩入　勤（蚕30）　長野産で仲々覇気があり、結城第一高校の中心勢力の保持者学校長から絶対の信頼をうけている。同校の蚕業は県下一の定評があり、彼の手腕こそわれわれが学ばなければならないと思つている塩入農場主任様も近い将来であろう。一そくとびに校長は一寸無理である。（結城在住）

○米川富美（蚕33）　卒業と同時に上郷高校に勤務されたが、今は郵便局長として活躍している。矢張り教員の俸給より局長の方がよいようである。町の名望家に生れた彼は局長として板についたようである。茨城の写真クラブでは第一人者という腕をもつている。うらやましい限りである。それに愛妻家ときている。われわれは写真機さえもてないのに―。（茨城町在住）

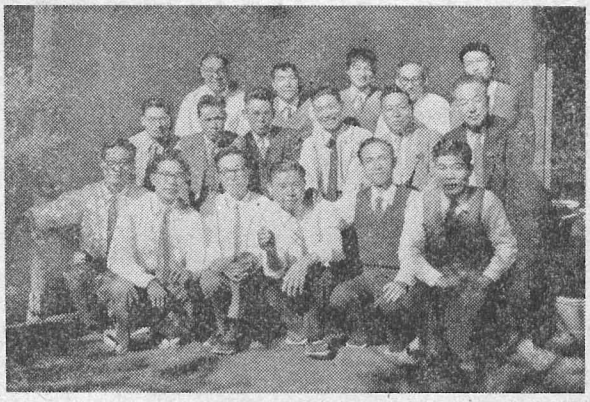
○影山　剛（蚕33）　東京工業大学から終戦後大水農高校に迎えられ繊維農業科の機織工場を一手に引受けての大活躍。矢張り学者タイプ。彼の機織こそ全国一の折紙はつけられるであろう温厚で着々その実績をあげており同僚教員から尊敬されている。愛妻と坊やは彼の帰宅を毎日くびを長くして待つているそうだ。（水戸在住）

○永井保朗（化4）　天下の大水農高校勤務十年という経歴をもつており化学人だがお蚕さまを飼育している異例人である。もう養蚕科出身者より飼い方の上手なのには驚いた。水戸農業高校では勤務年数から云うと古株で、老人教員も彼には歯がたゝないそうである。愛妻家であると同時に山を愛する第一人者。茨城県の山クラブ結成にほんそうしている。山に狂う男でしようか。同氏は同じ保ちやんという奥様と、保ちやんという御嬢様と坊やの四人住い。親子三人が保ちやんという御家庭はまあ全国にも珍らしい。御想像下さい。（水戸在住）

○大工原　卓（蚕36）　大子第一高等学校に勤務しており、温厚で職員から信頼され、早く奥様を迎えるよう次から次ぎ候補者と向けられるらしい。余りに候補者が多いためか、久慈川の若鮎も最近メッキリ少なくなつたそうで大公望連中は困つているそうである。（大子町在住）

○宮崎貞吉（糸38）　石岡市の新栄製糸工場に青年技師として大活躍。彼の製糸開拓熱は大したものだ。将来は名工場長は間違いないようである。独身ですからどうぞよろしく。（石岡在住）

○金井節博（蚕大3）　上郷高校に勤務、最年少のいわゆる〝若き教員〟であるが仲々勉強家。彼のお得意は英語である。外人との交通も学生時代から今まで継続している。彼の英語熱には驚いた。お蚕様の飼い方よりも英語の方が良い様である。研修意欲は同校では第一人者で、経験をもつている古い教員は頭



【寫眞説明】　前列右より宮崎貞吉(糸三八)谷沢衞(蚕二六)金井節博(蚕大三)米川富秀(蚕三三)影山剛(蚕三三)永井保朗(化四)　中央右より前沢康雄(蚕一四)船渡勇平(蚕五)加藤省三(蚕一九)丸山十吉(蚕一二)本間久(糸八)堀川収(蚕二〇)　後列右より塩入勤(蚕三〇)生天目久平(蚕二五)大工原卓(蚕三六)竹内博雄(蚕一九)渡辺嘉博(蚕二二)　(於水戸芝田屋本店)

が上らないそうである。独身という有利な条件にあるので近い将来には是非どうぞ花嫁さんをたのみたい。

（豊里町在住）

○加藤省三（蚕19）　筆者（上郷高校勤務）各位の御想像に一任したい。水戸偕楽公園の一角に住んでいるから常盤線通過の際は御立寄り願いたい。観梅にはどうぞ！

（水戸在住）

支部総会当日に御出席の出来なかつた各位の横顔がはつきりしないので、次回の支部総会の時カメラで御紹介したいと思うので今回はこれでご勘弁願いたい。（蚕十九回卒）

千曲會報其他にあくたれる

香山清和

千曲会報を隔月送つて戴いて有難う存じます。早速拝見した証拠に感想を述べることにした。折角の御骨折によるものであるから大いに賞めようと努めたが、好い所を発見することが下手な上に賞める事もまた余りうまくないので柄にもないことは中止し得意中の得意たるあら探しをやつて悪口を書く事にした。悪口とは悪くないことを無理に作つて悪く云うことである。又物の善悪は相対的のもので一人が最も悪いと考えるものが他の人から見れば最もよい事になるかも知れない。それ故筆者が悪く書いても気にする勿れ、然かもお世辞。お愛嬌の積りで書いたのである。当局の方々の御苦労には常々感謝している事を申上げて置く。

筆者の辺り出した序に千曲会報以外にも触れた。これ等も同じ意味で書いた事を御承知願いたい。

こうことわつて書き出せばどんな事を書いても叱られることは先ずあるまい。せいぜい悪口雑言を吐きましようかいナ。

○

千曲会報五三号は年賀広告が掲載されるので新年早々来るものと思つていたら仲々来ないので筆者の処を忘れたのではないかとひがんで本部の誰やらに聞いて見たら未だ出ないとのこと、そうしたら一月十一日に漸く到着した。これでは年賀広告の価値はないではないか。尤も資金援助の目的で出した人は別であるが……。筆者は賢明だからこのことあるを予知し年賀広告をしなかつた。なんて威張つて見せたが本音は金が無いから広告する柄でもない。そうかと云つて援助する程の余裕もないからである。

年賀広告の不手際はそれ許りではない。戴つている人は殆んど母校の人々と総会に出た人々のみではないか。なぜ広告を出すなら出すで前月号で募集しなかつたのか。

新年号に拘らず年賀広告のある以外何処にもそれらしい匂いがしないのはどうした訳か。せめて第一面の理事長記事丈にでもその片鱗が欲しかつた。又最も体裁の必要な第一面の記事の末尾がブランクになつて怪しげなカットが入れてあるのも不手際だ。何故行間を整理して一杯に詰めなかつたか。これは印刷所にも一半の責任はある。こうしたブランクは其の他各面に亘り三ヶ所もある。

二面に総会記事と銘を打ちながら予算、決算が九面に離れて載せられているのも可怪しい。これも総会記事ではないか。

梁親会記事も総会、梁親会の出席者氏名も載せて欲しかつた。梁親会に出席された先生方は今回は珍しく多かつたようだが筆者の会つたのは学部長、両佐藤、呉、三浦、隅田の六先生だけであつた。梁親会に先生方が出席して下さるのは実に嬉しい。その意味から出席された先生方の名前が知り度い。

総会の発言者の名前をABCなどと仮名にするのはよくない。本名を堂々と載せる可きだ。又発言内容の記録も極めてルーズだ。筆者の帝国発言も「千曲会館を繊維会館などの意見も出て」で片付けている。筆者は「千曲会館は校内にあり需附してしまつたため余り役に立たない。五十周年記念事業として市内に繊維会館を建てたい。もう一つ繊維展覧会をやり度い」と云う意味のことを発言した筈である。それをあれ丈の文句にしては意味がなさないではないか。

（何面に続く）

（何面より続く）が幾つもあるのもよくない。組方及び行間の調整に努力すれば避けられると思う。

会費領収氏名を一段一名宛とし下があいているのは不体裁であり無駄である。段を無視して一杯に詰めては如何。これも印刷所に関係がある。

誤字が非常に多い。筆者の分丈見ても「思うこと云わざる」が「思うことは云わざる」に、「予算機構」が「予算が機構」に、「役員会」が「役員等」に、又「筆者の責任」を「筆者の文書」となつている。その外に丸や点の誤りは多数ある。編集子に云わせたら原稿をもつと解るように書けと云うだろう。正にその通り、筆者の醜い原稿であれ丈の誤字で済めば好い方かも知れない。

千曲会報の使命として住所移動は毎年載せるべきだ。役員会の状況も書く可きだ。次号には一月の拡大役員会の記事が必ず載るものと期待している。母校ニュースも、もう少し多く書いて欲しい。記事の配置が乱雑である。何面は何んの記事と云う風に整理すべきだ。広告的性質を有する記事を一般記事と同じに取扱つているのもよくない。広告は字を大きくしたり枠をつけたりして目立つようにした方がよくないか。

人のやつた結果を見て悪口を云う事は極めて容易である。それでいゝ気になつて小姑のように余り細かいあらを探して嫌らわれるといけないからまあこの辺でやめて置くことにしよう。

○

物語は少し古くなる。五十二号の千曲会報を受取つて開いて見たら振替用紙が入つていた。二十九年度の会費を出せと云う訳である。こう書いて来ると会費も払わぬくせに大きい事ばかり云つてけしからんと云う御仁があるかも知れんがこれには訳がある。話せば長い事ながらこう云う訳だ聞いてくりよ。

筆者は廿八年に上海から帰ると直ぐ本部を訪れこれ迄の未納会費を完納した。処がその後で色々教つた。会費は支会を通じて納めるものでそうすると支会に割戻しが入る、会費の納入率は戦後非常に悪くなり一割位にしかならない等々。其処で出してしまつたのは仕方がないとして今後は正規のルートを通して出す。闇取引はやらぬこととし、なお筆者の属する上小支会の血の巡りを打診する意味を含め正規の筋から請求があるまで出さない事にした。処が待てど暮せど請求がない。待ち切れなくなつて井沢支会長殿を訪れ払う方から催促に及んだそうしたらその内に貰いに行くからもう少し待つて呉れとの事であつた。それつきり取りに来ない。収入が少いのを同情して取らない積りかなと気を廻しても見た。その内に筆者は長野へ通勤する様になりどの支会に属するか分らなくなつた。千曲会総会に出席したら出席者名簿に筆者の名が長野支会に入つていたので

千曲会名簿発行

既に会報上で度々御通知したように会員名簿が完成しました。今回は今迄と全く変つた形式をとつて支会別にしましたので各位の御利用には非常に便利になりました。尚独立会計でやつている関係上発行部数が少ないですから、なるべく早く御申越し下さい。

記

一、頒布価格　金弐百五十円（但送料共）
一、代金は現金で手紙に同封して送れますから御利用願います。
一、宛名は千曲会名簿編集部宛として下さい。

千曲會名簿編集部

旅費を請求したら新発行の千曲会名簿には上小支会となつているからとことわられ態々拙者の支会は何処でござると云う事になつてしまつた。会費の収めようがなくなつた訳だ。困つている処へ待てば海路の日和あり振替用紙が来たので嬉んで……本当は仕方なく……払込んだ訳である。振替用紙を用いる事は賢明な策である。あまり賞める事のない本部のやり方の内これは大出来と賞めて置く。支会長許り頼りにせず大いに振替用紙を利用する事だ。尤も非常によくやつて下さる更埴、安筑、竜川、群馬、東海、三丹兵庫、山陽、山形等（落ちていたら御免なさい）の支会長は別であるが……。

大体会費一ヶ年二百円は安過ぎる金額である。自慢じやないが収入の少ない点では自他共に許している筆者にも大して苦にならない金額であるから大方の人達には安過ぎて払う気になれないのではないかと思う。だから振替用紙が来れば誰でも直ぐ払うだろう。現在の会費の納入率の悪いのは払わぬのでなく集めないのであろう。上小支会の二、三の人に会つて聞いて見たら異口同音に取りに来ないから払わないのだと云つていた。それで筆者は考えた。これは一つ筆者が上小支会の会費徴収係を引受けて集めて廻つて見てやろうか、そしてその結果がよかつたら隣の支会へ行つてやつて見よう。斯くて遂には全国に股をかけて……そしてその集つた金の一割位をリベートとして貰うかと考へた事もあつたが、現在長野へ通勤していてはその暇もないので計画丈で終つてしまつた。誰かやつて見る人はありませんか。

然しこんなやり方は非常手段である。又振替用紙を送るのも本来のやり方ではない。理想は組織を利用するにある。会費の徴収が組織の強化となり組織の強化が会費の増徴となる。卵と鶏の関係で行くべきである。名前ばかりの支会長はやめて貰い本当に千曲会を思い手間を惜しまず働いて呉れる人にやつて貰うべきだ。

然し皆本業があるので仲々そうも行くまいが少くとも形式丈の人でなく実際やつて呉れる人を選ぶ事だ。

それでも未だ本部と支会長との関係はよい方だ。よくないのは支会長の下の組織である。殆んど組織のない処がある。支会長の下に職場、住所、知己等を勘案しつながりをつけ誰は誰と誰と誰……を責任を持つて連絡すると云う風に組織化しなければならない。若しこうした下部組織が完全に出来たらもうしめたものだ。会費は容易に集るだろう。会費が一割位しか集らない内は出さない者が大いばりで出すものが小さくなつている状態である。それが五〇%を越えると状況は反対になる。それから後は自然に増加して行くだろう。是非どんな無理をしても五〇%迄漕付け度い。筆者もその熱に燃えている一人であるが残念ながら金と暇がないので思いながら充分出来ないのを残念に思つている。然し口だけではない積りだ。やれる仕事があれば寸暇を裂いて馬の足位は勤める積りである。

○

筆者は昭和九年から十四年まで千曲会報の編集をやつた経験がある。当時は千曲会報の最盛期であつた。勿論毎月発行、学生にも殆んど買わせたものだ。それで平均十五頁多い時には三十二頁にも達し版も大きく密度も混んでいたので当時の一頁は現在の一、五頁に匹敵したであろう。この事は筆者の腕がよかつた訳ではない。千曲会が盛大であつたからである。尤も筆者は根が甘いたちなので大いに本業をおろそかにして努力した事はしたが。今のように多人数を揃え毎日担当者を変えると云う様な巧妙な手を知らなかつたので僅かな人数で毎月骨を折らせられたものだ。この辺の事は当時のコンビ町田先生がよく御存じの筈だ。原稿は毎月余つて来月廻しとしたり、たまには没書も敢てした。筆者のこの原稿などもその当時だつたら字が解らない、内容がよくないなどの理由によつて没書にされた事だろう。

当時は高嶋と云う口から先に生れたような御仁や芝荒雄と云うその名の通りの荒武者がいて何んだかんだと賞めたりけなしたりして呉れた。それがいゝ刺戦になり役に立つて一生懸命になつたものだ。

千曲会報も漸く隔月発行になつた。喜ぶべき事である。然し往年に比較すれば問題にならない。一日も早く毎月発行になる日を待つている。多少無理をしても早くやるべきだ。千曲会報の発展は即ち千曲会の発展、千曲会の発展は母校の発展であるからである千曲会報を毎月発行にしたらと勧めたら費用は兎に角、記事がないから駄目だとの事である。筆者も大いに書く積りだが、会員諸氏よ大いに書いて欲しい。自分の書いた記事が載ると会報の見方が大いに変るものである。往年の大家碓氷氏、池田氏、出野氏等よ一つ若返つて名筆を振つて呉れませんか。当時のように来月廻しや没書はなくその上、名誉ある手拭を呉れるそうですから。それにしても、石倉先生が相も変らず原稿を寄せられるのは嬉しい限りである。先生の奇抜な御意見には何時も面白く読ませられる。こうした卒業生以外の方々から原稿を頂く事はこよなく嬉しい。その意味で朝倉先生が寄稿された事は感謝に堪えない。梨親会にも出席して下さつたとの事、顔も知らない先生に本紙を通じて御礼申上げる。御意見の通り賛助会員が形式丈のものではよくないと思う。理事長さん考えて下さい。

○

何ヶ月か前の千曲会報に大滝先生の訃報が報ぜられた。先生に就いては色々興味ある話があるが始めに書いた年賀広告についても面白い話がある。

筆者が千曲会報をやつていた当時も年賀広告は重要な財源であつたので盛んに募集したものであつた。処が前任者の須田さんから引継いだ当初校内で大滝先生丈け広告を出していなかつた。それで須田さんに聞いて見たら絶対に駄目だとの事だつたので一年目はその儘とした。二年目になつて試みに先生の処へ行つて補助の意味もある旨を述べてお願いしたら確か内藤さんが同席していたと思つたが、にべもなくあつさりことわられた。後味の悪さを覚え行かなければよかつたと後悔しながら自分の部屋へ戻つた。少し経つと先生が態々やつて来られ「私は年賀広告は出さない主義なのでことわつたがあれは補助の意味があるんだつてねえ。そう云う事なら大賛成だからこれを取つて呉れ給え」と云われ十円置いて行かれた。当時の十円は大金ですぞ私はすつかりよい気持になつた。私はこの事によつて先生

特別活動資金の募集について

特別活動資金の募集につきましては、昨年の支会長会議で議決され、引続いて秋の定期総会に於ても色々と論議され、又その模様については歴次の会報にも掲載されたので、大体御承知の事と思われますが、此の資金の使途は従来やゝもすると消極的だつた就職斡旋を、積極的に行う為のもので、此れによつて本会に魅力を加え同窓精神昂揚の一助にしようと云う訳であります。尚此の就職斡旋は急を要する処がありますので、母校創立五十周年記念事業の一ッとして開始するのでは有りますが、此の事業だけは他の記念事業と切離して直ちに着手する事になつたもので有ります。

御醵出を御願いするに当つて当初一部有力者のみに御願いするの議もありましたが、その後寄り〳〵協議の結果、同窓共済の気持ちから全会員に呼びかけ、御醵出を御願いする事になりましたので、何卒御賢察御賛同下さいまして奮つて御醵出の程を御願い申し上げます。

尚御払込みにあたつては会報に折込みの振替用紙を御利用願います。勿論分納も結構です。

に幻滅の悲哀を感じた。と同時に他方と於て先生の偉大な面を発見したのである。それ以来先生に親しみを覚えしば〳〵先生のお宅を訪問したものである。

先生は唯の豪傑ではなく偉大なる政治家であつたのである。一度先生を校長にしたらさぞかし名校長であつたろうと思つた事である。それ故中国から帰つて来て以来一度先生にお会いして見たいと思い林先生に御住所を教わつて置きながら喰うに追われて延び実現されない内に先生は亡くなつてしまい残念な事をした訳である。紙面を通じ先生の御冥福を祈る次第である。

○

筆者は二十八年の引揚者であるこの有難くない有資格者は会員中に百名以上あるだろう。その方々は引揚以来既に十年、その間の苦しみは非常なものであり、現在もほんの一部の人を除いては尚苦しみの連続であろうとお察しする。その我々にも僅かではあるが光明が訪れんとしている。大抵の人は御存じと思うがそれは我々の外地に置いて来た財産十一兆円が賠償に引当てられていることが明瞭となり、二十二国会に於いて国家が早急に補償すべき旨決議され、うまく行けば本年末には最低一世帯当五万円の暫定補償が出来る見通しがたつた事である。筆者はこの問題に対しひたむきの努力を払つている一人である事を御承知願いたい。今が最も大切な時期なので運動を続けている引揚者団体に対し物心両面の協力を切にお願いする次第である。筆者は若しこの金が入つたら一割位を母校五十周年記念事業に寄附しようかと考えている。引揚者諸氏よ満場一致本案に賛成せられん事を望む。それが実現すれば本部に最低五十万円の金が入る事となる。現在出来ている案で計算すると満洲生活の長い湯川氏は三十万円、池田氏は二十万円になるがその一割は相当な金額になるので果して出して下さるかどうか。貰わない内は文句なしに出す気でもいよ〳〵貰えたとなると気が変つて嫌になるかも知れない。筆者自身もその時になつて心境が変化しなければよいがと今から心配している。

○

総会に行く関所で名簿を買わせられた。表紙の体裁もよく甚も以前の倍位あり二百五十円では高くないと思つた。それに支会別に組替の仕事は容易でなかつたであろうと当局のお骨折り感謝した次第である。

そんな訳で大いに感謝に満ちて家へ帰り内容を見て行く内に間違いの多いのに驚いてしまつた。これでは安くないですぞ。

人のはさて置き筆者の場合も勤務先は県庁振興課になつていて県のお役人様に聞えるが、本当は団体職員で県庁振興課厚生課内長野県企業福祉連合会である。住所も上田市諏訪部町など云う所はありません。上田市諏訪部二一七〇であります。こう云う風に訂正して見ても殆んど会員諸氏と関係が絶たれている筆者の事であるから何んにも価値はあるまい。然し筆者にとつては大いに使用価値が減少したように考えられたので出版元荻原先生に会つて値引を交渉したがお聞届けにならなかつた。

結果を批判する事は卑怯かも知れないが名簿を科別年度別から支会別に換えた事は大変な御苦労であつたと思うがそれ丈価値があつたかどうか。因習に拘泥する筆者は前の方が便利のような気もする若し変えるならABCかアイウエオ順の方がよくなかつたか。第一支会別では絶えず変化して整理の繁に堪えない事になりはしないか。

もう一つ総会の席で予約させられた写真も六十円は安いと思つたが現物を受取つて見たら下手くそだ。それに名前書もついていない不親切さだ

これではやはり安いとは云えない。

○

何時だつたかの役員会の席上五十周年記念の話が出て資金約二百万円で実施するとの説明があつた。そのやる計画が余りお座なりの事許りなのであれをやれ、これをやれと註文をつけたら、金が無いから出来ないと云う御返事、そんなら五百万円位集めたらと云うたら、それはとても駄目だとあつさり蹴られてしまつた。そんなに実現性がないのだろうか。廿五周年記念事業は千曲会最盛の時に行われたものではあるが二万円位集つたと記憶している。五十周年には会員数は当時の倍以上になると思うから物価指数を二百倍（実際はそれ以上であるが）として八百万円になる。筆者の云う五百万円は穩当ではないか。

然し現在は当時に比し蚕糸業は縮んだ。千曲会の組織も昔日の様ではないと云うかも知れない。それも多少は認める。然し紡織及び繊維化学は当時より遙かに延びている。千曲会の事は自分自身の事であるから以前のような勢に否それ以上にしようではないか。五十周年記念に緊褌一番大奮発をして貰い之れを契機として大発展し基礎を築こうではないか。

筆者も今から大いに節約してと云うても節約する余地もなし売る物もないので仕方が無いから三度の食事を二度に減じて貯めて義務を果し度いと計画を巡らしている。

（紡三卒）

母校便り

卒業式行わる

三月十日大学第四回目の卒業式が行われた。此の日は晴れて薄日がさしては居たが寒い風が吹いて思わず肩をすぼめる様な日であつた。午前九時に開始と云う事であつたが多分本当に始まるのはもつと遅くであろうと嵩をくくつて九時半頃ワラ半紙と鉛筆をひそませて、式場である講堂へ行つて見ると、早くも学部長の挨拶が始まつている処であつた。

式場は正面に対して右側に学部の諸先生、左側には来賓中央には卒業生が着席、階上には父兄と在校生が着席する卒業生は皆綺麗に頭を刈つてなんとなくすが〳〵しく見える。普段の様に頭髪の中からカラーが見えかくれする様な頭をして居る者は流石に見当らない。在校生の出席は極くわずかでなんとなく寂しい感じで有る。

学部長の挨拶が終つて佐藤学長から蚕蚕、製糸、紡織、繊維化学、専攻科の順に卒業証書が授与され、ついで学部長より別科、選科の卒業証書が授与される。

私は二階の片隅に座つてつて居たが、外を吹く寒風に窓がが〳〵と音を上げる。先生方の席の上方に硝子のかけて居る所があつて、先生方が時々これを気にされて風の吹き込む方を見て居られる。ストーブの煙突が何の変哲もなく二階の前面の空間に突き出て、煙突の曲りの継目から時々風が吹き返すのかぼつ〳〵と煙がもれる。

ついで佐藤学長の祝辞がのべられる。〝諸君は父兄と諸先生方の御蔭で今日を迎えたのだからこの恩は決して忘れてはいけない。我国がより立派な国となる為に諸君の様な若人の力を待つて居る。大いに活躍してもらいたい〟と云う意味の事をのべられる。学長が〝諸君の様な純情青年を厳しい社会に送り出すのは一抹の不安がないでもないが〟と述べられた時、ふと右側の窓に目をやると三月と云つても未だ〳〵蕾の固い桜の梢が風にゆれ動いて居るのが見えて、何かこの事が学長の言葉を象徴して居る様に感じた。

ついで文部大臣の祝辞（代読）、林県知事の祝辞（代読）、千曲会代表の祝辞は久保田正樹氏（蚕三回卒）が述べられる。

此れ等の祝辞を聞きながら私は十年前の自分の此の日の事を思い出していた。社会へ出る事の喜び、学校を去る寂しさ複雑な気持ちがミックスされて、かもし出される緊張に身を固くして大きな希望に胸をふくらましたものだつたがと、毛がすり切れて幾分ひかり出したズボンの膝を気にしながら、ちよつぴりうら悲しい気分にさせられたのであつた。

在学生代表の送辞、卒業生の答辞があり、螢の光の斉唱があつて十一時三十分式はとどこおりなく終り、本科一〇三名、別科三五名、専攻科九名の学生がなつかしの母校を後に勇躍社会へ巣立つて行つた。

若林記（農一卒）

今春卒業生の卒論のテーマ

養蚕學科

蒲生研究室

池田和芳　温度障害が蚕の二、三の酸化酵素に及ぼす影響について

上原勇作　家蚕の変態に伴う脂肪組織の酵素作用に関する研究

塚田光弘　家蚕の発育と血球に及ぼす放射性同位元素P32の影響に関する研究

別府　茂　蚕卵発育中におけるヴィタミンCの分布について

柳沢武彦　家蚕の発育と血球に及ぼす放射性同位元素Ca45の影響に関する研究

佐藤春太郎研究室

大槻英雄　化性を異にする蚕体内（体液及び蛹体内卵）のトリプトファン代射物質の消長について

大井昌次　メロゴニーに関する研究　I種々なる処理方法とメロゴニーの出現率、II高温接触卵内の雄核の行動と発育（細胞学的観察）

中山芳明　日本種と支那種の原種及びその正逆交雑に於けるCatalase並びにTyrocinase作用の遺伝学的消長

矢木研究室

小川原禎寿　合理的施肥並びに土壌改良による桑園能率増進に関する研究

徳嵩　保　尿素葉面撒布に於けるビュレット含量が桑品種並びに撒布時期による葉質に及ぼす影響

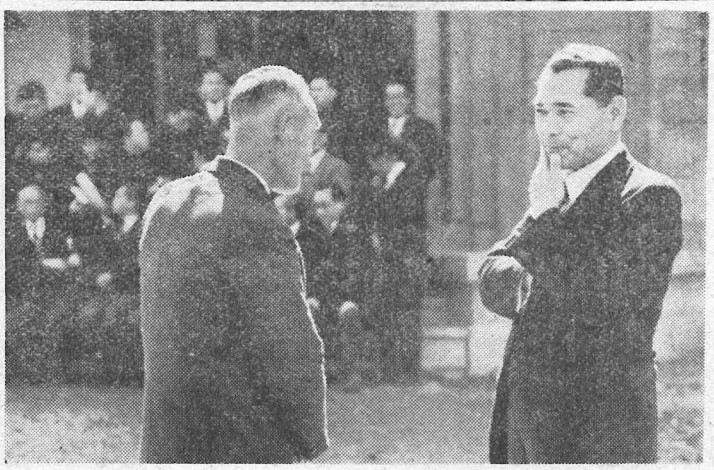
米沢秀衛　石灰過剰施用による置換量マンガン含量及び桑葉中のマンガンの変化について

山口研究室

鬼久保哲男　蚕児の運動並びに消化作用に及ぼす神経球除去及び頭部結紮の影響

倉島秀雄　蚕卵の活性度と酸素消費

佐藤　裕　蚕児中腸の消化吸収機応に関する研究



卒業式スナップ（教授と卒業生の親）

撮影、信大光画クラブ（金井正一）

西沢研究室

窪田衛二　家蚕卵に於ける酵素に関する研究

田口研究室

林　弘　春蚕用桑の生長状態と細胞液屈折率との関係

宮沢喜久男　枝条伐採時期並びに方法が桑樹の盗出量に及ぼす影響

小松茂男　桑樹の耐乾性と蒸散作用との関係

竹田研究室

塩沢昌春　膿病蚕及び軟化病蚕の囲心細胞及び周気管細胞中の遊離アミノ酸について

竹鼻孝夫　家蚕蛹の頭部切除と産卵との関係について

室賀明義　家蚕の発育並びに変態に伴う周気細胞及び囲心細胞中の遊離アミノ酸の消長について

石井　晋　ヒマ蚕の変態に伴う囲心細胞及び周気管細胞中の遊離アミノ酸の消長について

松尾研究室

清水昶博　桑芯枯病菌各種培養系の病原性とセルラーゼ及びペクチナーゼ生産との関係について

高木武人　桑芯枯病菌第十八号菌Saltantの病原性とセルラーゼ及びペクチナーゼ生産との関係

手塚俊彦　ニセアカシヤ、エンジュ及びネム菌の枝枯性疾病を基因するフザリウム属菌と桑芯枯病菌との比較研究

西山　繁　白紋羽病菌及び白絹病菌に対するクロールピクリンの消毒効果

八木誠政研究室　竹内千枝子　モンシロチョウの鱗片内プテリン色素は食餌によつて変るか。

小泉研究所

林　善三　世界恐慌下に於ける蚕糸業の二、三の事実

佐藤利一研究室

八幡哲司　蚕児の健康度と消化液の殺菌力との関係について

製糸學科

高木研究室

岡島郁夫　製糸薬剤（界面活性剤）の化学構造と生糸への吸着について

土屋　慎　製糸薬剤（界面活性剤の生糸の吸着に及ぼす塩類の影響

田中信二　製糸薬剤の生糸の摩擦係数と触感に及ぼす影響

横内和多良　繭層セリシン溶液の粘度について

荻原研究室

青木喜平　絹繊維の結晶及び非結晶部分に於ける無機成分の分布について

香山至朗、関弥三　赤外線の繭質に及ぼす影響に関する基礎的研究

吉沢直葵　サンプルの形態による精練度の信頼性について

石川研究室

大平昭人　絹フイブロインの複屈折について

御子柴睦　絹糸の脆化について

水出友雄　小量試料の無水量測定に関する一考察（特に生糸について）

和田義郎　セリシンの生糸弾性機構に及ぼす影響

市村　亘　糸条班変化程度と繊度変化率について

白井研究室

浅山正巳　生繭乾燥による繭層の厚さの変化について

大久保文雄　輻射熱の繭層に及ぼす影響

清水茂雄　乾燥程度による剥離張力の変化について

西沢研究室

月岡恒男　蚕体胃腔膜の化学的構造に関する研究

松林昭男　セリシン中の糖分について

林　研究室

宮入和夫　上蔟及び生繭取扱中の湿度が解舒抵抗に及ぼす影響

宇野保夫、和田定男　枠上生糸張力の一測定法について

金井　清　繭糸の吸湿性に関する研究

内田研究室

横関延久　金属製操糸小枠の破壊に関する一考察

柳沢研究室

浦沢一裕、久保田貞親　繊維の捩り抗力に関する一実験

紡織學科

一志研究室

岡島　勤　Cone harness motionの理論的解析並びに正歯車による開口運動の可能性について

木村幸雄、柳沢利一　粗紡機の性能向上に関する考察

呉研究室

渡辺　一、増田　実　可聴周波領域に於ける繊維及び織物の弾性

春原昌行、佐藤勇治、岡田暉夫　アセテートフイラメントの匍匐現象と回復現象について

丸山文茂、桜井和一　繊維の動的ヤング率に対する撚及び張力の影響について

野口研究室

西山勇、下原光男、青木茂実　醗酵精練に於ける残油脂量について

溝口信之、上原浩　織物の汚れに関する一考察

小林研究室

小宮山奠、浦野和雄　梳毛糸の内部応力に関する一考察
鈴木研究室
宮下徹、金井昭夫　単糸の強力及び伸度に及ぼす試長の影響に関する研究
小泉研究室
坂口光男　綿紡績業に於ける労働生産性について
三浦研究室
安部暎二　Viscose crapeについて
小島　脩　Tapestryの意匠と紋織について
小山　武　織布の理論的適正密度について
丸山正健　不良籾朽の原因について
大熊良孝　サイジングの一考察
古里研究室
瀬下忠嘉、湯原健敏　加撚時に於ける張力と縮みについて

繊維化學科

会田研究室
有賀淑子　ビニロンとP―アミノフロノラールとの反応及びビニロン染色の応用
池内　昂　t―ブチールフェノールを含む直接染料のビニロンへの応用
伊藤智夫　尿素ホルマリン樹脂加工による色調及び染色堅牢度の変化について
山崎久生　硫化染料によるビニロン―ビスコース交織物の染色
大平研究室
上山　厚　葉緑素の抽出及び精製法について
河合良一　有限変形の現象論的弾性論、鎌状高分子の有限変形の分子論的モデルに関して
木次国利　桂皮酸エチルを合成し之を単量体としてビニル型重合法によるスチロールとの重合性について
児玉　侃　イルパックスセルラーゼの濾紙電気泳動による精製について
小山直方　羊毛のジアゾカップリングについて
竹原　昭　酢酸菌によるセルローズの生合成について
広瀬邦雄　棉糸のカルボキシルメチル化による水溶性の糸の製造について
深井英男　蛋白質のホルマリンによる作用
宮沢守男　N置換ポリアマイドによる羊毛の防縮加工
隅田研究室
宇羽野元　繊維の静電気に関する研究
野崎悦宏　絹の内部樹脂加工による品質改良研究（絹の胆油能について）
樋口栄四郎　紡糸液紡糸能に関する研究（ポリ・ヴイニールアルコールの曳糸性について）
黒岩研究室
小笠原真次　高級アルコール燐酸エステルアミン塩水溶液の電気伝導率と解離性（界面活性剤のミセル形態とその物理化学的性質との関係）
片桐　康　界面活性剤の非ニュートン性流動と化学構造との関係について
小池幸澄　高級アルコール燐酸エステルアミン塩水溶液の粘性挙動と化学構造との関係並びにその解離性について
北条研究室
尾崎行也　両性イオン交換樹脂に関する研究（キレート形成にもとずく金属吸着に関する基礎的研究）
金子隆一、白井英男　フェニルグリシン、ルーフェニルイミノジ酢酸、フェニル尿素、フェニルチオセシカルバチッド、フェニルグリシン―○―カルボン酸よりの撰択性イオン交換樹脂の合成
三浦秀男　撰択イオン樹脂に関する研究、3ヒドロオキシフェニルチオ尿素樹脂について
坂口研究室
佐上　孝　ペーパークロマトグラフ定性定量用光電比色計の試作

本学部に入学志願者殺到

信州大学の三十一年度入学試験は三月二十三、四、五日（但し本学部別科は二十六日）の三日間に亘って行われ、本学部各学科の入学志願者は一般の入学難が反映してか、我が学部の真価が漸く再確認されたのか、北は北海道から南は九州迄日本全国から集り左表の様に高い競争率に達した。

	定員数	志願者数
養蚕学科	三〇名	九〇名
製糸学科	九〇名	五五一名
紡織学科		
繊維化学科		
別科		
養蚕コース	二五名	六四名
製糸コース	一五名	三四名

自働操糸機の公開実演行わる

製糸学科では二月四日YIN式恵南型快速自働操糸機及び、たま式自働操糸機の公開実演会を行った。各地から製糸関係技術者や関係者が多数見学に来校、皆機械の偉力に驚嘆した。

住所異動（昭和三十一年一月調）

頁	氏名	卒業回数	旧職	新住所
元	行元白忍	蚕三四		鳥取大学本部（鳥取市吉方官舎）
三	金子光	糸二九		北海道大学医学部薬学科（札幌市）
三	阿部道夫	糸一八		幌別町役場
元	東家明秀	糸二五		宮城県繭検定所長（仙台市中町傘見）
三	倉田正一	蚕三三後		死亡
四	（阿部）文作	糸三五		群馬県蚕業試験場（前橋市）（大森改姓）
四	小林信夫	糸二五		前橋乾繭所（前橋市細谷沢町）
三	伊藤一義	学蚕二		埼玉県毛呂病院
三	持田正彦	糸二九		埼玉県蚕業試験場秩父支場（秩父市）
三	伊藤正雄	〃		千葉ちやる株式会社（館山市館山）
三	西営源三郎	〃		江見中学校（安房郡江見町）
三	上野康司	〃		日本乾燥機KK（浦和市）東京都池袋町一の六六四
究	鈴木敏夫	糸一〇		通産省機械検査課（市川市北方一七三）
公	小山田道男	化五		自営　富士吉田市宮下町
一〇三	大池欣剛	糸二七		小諸療養所（療養中）
一〇三	小林剛	糸二九		上田市踏入九四三
二二	奥里芳夫	蚕一八		丸子実業高校（北佐久郡浅間町）
二六	岩下竜也	糸三七		長野県繭検定所篠ノ井支所（篠ノ井町）
四〇	清水勝郎	糸二九		豊坂中学校（松代町紺屋町）
四三	荒木栄	旧教		埴科郡戸倉町
四三	柳沢みや子	蚕三一		島田医院（長野市箱清水）
四四	島田猪一郎	糸三七		長野県蚕業試験場（長野市岡田町）
四五	清水利夫	紡一九		長野県庁農地部耕地課（長野市）
四五	中村正義	蚕三二		長野県庁経済部蚕糸課（長野市）
四六	中村盛一	化五		長野県庁（地方労働委員会事務局）
四六	西原昭三	農一		長野県庁農地部農地課
四六	宮沢孝雄	糸一八		日本紡績松本工場（松本市島内）
四七	鈴木玄九			

（以下次号）

会費領収

（十二月十五日現在）

昭和三十年度会費金弐百円也

木藤　半平（化　四）
笠原　義人（糸一八）
伊部ミサ子（教　六）
浪方　昌近（化　五）
及川　英雄（蚕大一）
綠間　武（糸三五）
太田　和夫（紡二一）
相場　高雄（蚕三三）
神津　昭（蚕三六）
吉沢　武夫（糸　四）
石塚浪之助（〃　七）
松下　紀男（〃一七）
羽生　英尚（〃三〇）
槻沢　悌三（糸三八）
清水　悦雄（糸大一）
斎藤　菊雄（蚕　六）
市瀬　武寿（〃二一）
三沢　保（蚕別一）
木下　敦（〃　二）
仲村　治雄（〃　）
下平　文穂（農　五）
黒岩　真二（蚕大二）
筒井　忠夫（蚕大二）
櫛原　清志（蚕別三）
臼田　英信（農　三）
林　宏一（蚕大三）
吉川　孟文（蚕　八）
松岡　潔（〃一四）
伊藤　文男（蚕三二）
市瀬　猛文（農　一）
野邑　昭雄（糸三四）
小松　歳雄（化　六）
篠田　正信（紡二二）
神崎　聖徳（蚕二七）
堀内　隆吉（紡二六）
柳沢　和典（〃二八）
清水　一郎（〃大一）
三輪　貞徳（蚕一三）
代田　久郎（化　二）
原　相模（糸二五）
古山　宗八（蚕　二）
栗原　章（〃　五）
後藤　仙弥（〃　九）
井上兵一郎（蚕一二）
前田　雅弘（〃一三）
有我　彰夫（〃二〇）
井上　貞二（〃二八）
斎藤　幸蔵（〃一五）
小野　昭夫（〃三五）
馬場　昭（糸大二）
滝沢　寛三（蚕大三）
久保村安衛（蚕別二）
山岸　松次（蚕二二）
細田　増郎（糸三〇）
久保田哲二郎（紡二〇）
勝野　貞哉（蚕三五）
鈴木正一郎（〃二二）
橋本久之助（蚕別二）
好士　泰造（糸　八）
由井　千幸（〃一六）
小林宇佐雄（〃三八）
村山　穣助（糸大一）
飯島　トヨ（教　三）
峰村　稔（糸大一）

昭和三十一年度会費

及川　英雄（蚕大一）

未納会費納入者

金壱千百円也

笠原　義人（糸一八）
近藤　清一（紡一一）
古山　宗八（蚕　二）
後藤　仙弥（〃　九）
斎藤　幸蔵（〃一五）
藤本　斉（紡　八）
上木　忠士（糸二二）
多勢　一（〃三〇）
勝野　貞哉（蚕三五）
森泉　文男（農　二）
山木三六郎（蚕一〇）
黒岩　君雄（紡一四）
清宮　保（糸　一）
島倉　督造（〃　九）
望月　太一（〃一七）
茅野　和雄（〃二八）

金壱千円也

斎藤　格次（蚕　三）
小松　忠幸（糸二五）
小口　宗久（〃　）

金九百円也

宮沢　久雄（蚕二七）
鈴木正一郎（〃二二）
榎本　健治（紡一三）
浅野　俊治（化　四）
柵田　武夫（〃　六）
小泉　郁雄（紡　専）

金八百円也

綠間　武（糸三五）
相馬　高雄（蚕三三）
栗原　章（〃　五）
井上兵一郎（〃二二）
前田　雅弘（〃一三）
山崎　達夫（紡二九）
若林新一郎（糸一〇）
丸山　広（蚕三六）
手塚　政吾（糸一三）
小林宇佐雄（〃三八）

金七百拾四円也

新井　露子（教　七）

金七百円也

土屋　熟（糸一二）
高馬　一郎（〃一七）

金六百八拾円也

竹内くに代（教一六）

金六百六拾円也

池田　善三（蚕一五）

金六百四拾円也

長岡　範子（教　八）

金六百円也

松永　省治（糸三七）
寺崎　隆夫（紡一九）
細田　増設（糸三〇）
荒木　康男（〃一七）
塩入　重雄（〃二六）
久保田哲二郎（紡二〇）
堀内ヨシ子（教　七）
笠島金治郎（糸一六）
供野　邦敏（化　七）
藤森　敏雄（紡二四）

金五百円也

松村　恵一（糸二〇）
坂木　勝三（蚕三三）
田中　英一（蚕二八）
安部　重（糸二四）
武藤　寛（糸一五）

金四百円也

竹内　善吾（蚕一四）
小林　喜胤（糸別一）
有我　彰夫（蚕二〇）
小野　昭夫（〃三五）
久保村安衛（蚕別二）
西本　朝平（蚕一五）
田中　秀幸（紡大一）
有賀　文雄（糸　一）
橋本久之助（蚕別二）
橋本　武光（蚕　七）
高橋　真（糸三八）
山極　隆夫（化大一）

金参百円也

木内　庸一（蚕二六）

金弐百円也

大屋　正尚（化　九）
庄田　清子（糸別二）
伊部ミサ子（教　六）
所　寿男（蚕別二）
樋村　忠義（蚕一四）
北原　幸治（〃二六）
愚田　有昭（蚕　専）
腰塚　正吉（農　四）
大館　幸（蚕一九）
栗原　保定（糸　七）
金井　栄一（蚕三八）
田口富五郎（〃　九）
阿部茂一郎（〃一五）
宮林　昭樹（蚕三七）
水井　寿（〃三六）

編集後記

信濃の春は遅けれど
秋立つ事は……

の信州にも潮く春は訪れて、遠嶺には尚其処此処に雪が残ってはおりますものゝ、冬の寒さにスポンジの様にふくれ上った田圃には、鍬を振う人の姿が、そして冬との戦いに破れた衣を脱ぎ捨てゝ真新しい衣に着かえた麦の水々しい緑が見られます。

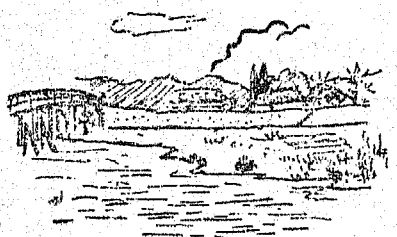
本号には会員多数より大変有益な御投稿を賜り、此等の愛会の熱情に溢れた記事を皆様方の御手許に御送り出来ます事は、編集子の深く喜びとする処であります。

尚香山さんからは編集上の種々な尊い御忠告を戴き有難度うございました。我々も会報をより立派なものにする為には平常大いに研究している積りでありますが、残念乍ら今迄は余りに投稿が少ない為に細かい編集上の技術もさる事ながら、一応会報の形にするのにも苦心すると云う様な有様で〝原稿さえあったら〟と〝靴をへだてゝ足をかく〟もどかしさを感じておった様な次第。会報も本号からは会員相互の連絡をより一層密にし、ひいては千曲会をより盛んならしむる為、毎月発行にするべく目下計画、努力中ですでに第三種郵便物の認可申請済であります。

従つて会員各位からの御投稿が潤沢でさえあれば必ずや此の計画も軌道に乗るものと思いますので、生活記、随筆研究評論、支会便り、短歌、詩、俳句、千曲会への御意見その他何でも結構ですから、どし〳〵御投稿下されますよう御願い申し上げます。

（若林記）

編集理事　田口亮平
編集部総務　小山長雄
編集部員　石川博
古平福紀
木藤半平
土屋幾雄
中原武
今井甲子男
田中茂光
西村善次



小林　信夫（糸三五）
小川　茂（蚕一六）
浜井　寿夫（〃　二）
水野　広（〃一三）
田附申次郎（〃　五）
三輪　久司（〃三四）
岡本　一男（〃三七）
宇田虎一郎（〃一〇）
岩根　謙（〃一一）
目崎　武美（〃二六）
岡庭　武治（〃二三）
山岸　保男（〃二九）
小平　一彦（〃三一）
桑島新一郎（〃三一）
岩井　実（紡二三）
神林　英雄（蚕三二）
小松　敬治（〃三八）
長井　利明（〃三六）
小山　清（糸一一）
小山　清一（〃三六）
福島　貞平（〃三六）
土屋　孝（〃一五）
谷内田昭一（〃三四）
黒沢袈裟彦（〃一六）
戸田　畯三（〃三二）
岡田　広太（〃二七）
湯本益次郎（〃二七）
小林　良亘（紡　二）
市川　信一（蚕二〇）
宮原　豊（〃三二）
中沢　隆明（糸三三）
和田　一武（〃三一）
新田　佳男（〃三六）
中島　茂司（蚕　八）
工藤　栄次（〃二七）
庭野明之助（糸一六）
大熊　康代（蚕一三）
森戸　晋（〃一五）
萩原　行雄（糸二〇）
小柳　源一（蚕二四）
間島　巻代（教　）
雑氷　茂（紡　三）
長井　一夫（蚕三七）
今井　哀（糸　四）

萩原　隆夫（〃三七）
宮田鉄五郎（〃　二）
鈴木　彦佐（蚕二六）
吉野　史朗（糸大一）
奥野　芳夫（糸二九）
武井　登（〃三〇）
木内　秀人（化　五）
永田　俊三（糸二一）
中里見友一郎（蚕大一）
大久保孝一（蚕二九）
上野　正美（〃三一）
村上亀久司（糸一七）
小野沢英次（紡二六）
松岡　重之（蚕三五）
桑原　宣治（〃三六）
島田　仁治（〃三六）
竹下　昭三（糸三〇）
加藤喜一郎（蚕　三）
篠田　正信（紡一二）
神崎　聖徳（蚕二七）
柳沢　和典（紡二八）
代田　久郎（化　二）
山岸　松次（蚕三二）
田中　治雄（蚕大二）
岡野　靖（農　二）
松沢　秀二（化大二）
竹村　治郎（紡大二）
関　鉄男（蚕別二）
小笠原喜代三（糸　八）
香山　清和（紡　三）
渡辺　嘉博（蚕二二）
赤沼　喜雄（〃三五）
酒井　淳夫（糸一八）
小林　庄二（〃二九）
宮坂　琢郎（化　四）
村山　穣助（糸大一）
小宮山利治郎（糸大二）
飯島　トヨ（教　三）
峰村　稔（糸大一）
金百円也
堀内　隆吉（紡二六）
清水　一郎（紡大一）
中村　広（糸二七）

（二月二十九日現在）
昭和三十年度会費金弐百円也
井出　初子（教一一）
酒井　嘉美（蚕一七）
高村　八郎（紡二八）
松山仁一郎（糸三四）
松尾　昭光（紡二七）
竹内　彦保（蚕三二）
本田　明（教　三）
森　美智子（〃　八）
伊藤　常治（化　四）
臼田　隆夫（紡二三）
馬場美智子（糸別一）
福田貴代子（教　五）
川人　良次（紡二一）
河合式太郎（糸二三）
福島鋼治郎（〃一二）
掛川　朝子（教一九）
堀内　米子（〃　）
古川　俊之（蚕一〇）
井上　大（紡二一）
丸山　十吉（蚕一二）
大井　正夫（糸二〇）
樋田　久吉（蚕三四）
加子　三郎（〃二七）
荻野　徹間（〃　八）
勝又　藤雄（〃　九）
米田　俊雄（〃一〇）
内田訓之亮（〃一三）
細川　豊（〃一九）
菊池　大郎（蚕二七）
目崎　正夫（〃二八）
新井　瀬（〃三一）
金井　保（〃三四）
久田　雅彦（〃三五）
竹内　邦雄（蚕大一）
平坂　忠雄（〃　二）
塩見　喜六（糸　三）
山岸　松次（〃　）
的場　小六（〃　六）
宮城　長雄（〃一五）
馬場　長市（〃一六）
太田　良信（〃一七）
小林　清志（〃一七）

千葉　達人（〃一八）
林　秀門（糸一九）
小林　進（〃三〇）
村上　義美（〃二四）
尾崎　孜（〃二五）
西井　茂雄（〃二六）
渡辺敬一郎（〃三〇）
二森　光雄（〃三五）
神林　茂（〃三七）
村岡　敬公（〃三七）
川上　守人（糸大一）
櫨田　実（紡一七）
加藤　隆正（〃二一）
山上　三義（〃二二）
柳沢　潤一（紡大三）
岩崎　俊男（化　二）
牧野　芳成（糸三七）
松井　忠計（糸大一）
筒田　義弘（紡二六）
瀬在袈裟雄（化大一）
大川忠一郎（蚕一八）
足立　統三（紡二七）
大久保　実（紡大二）
堀口　稲三（蚕二四）
小松　茂久（蚕九）
甲木　正道（糸七）
所　幸直（紡二八）
大塚　直人（〃二六）
降旗　孝（蚕一五）
宮沢津多登（〃三六）
滝沢　幸彦（〃　）
中山　吉二（蚕一二）
岡島　亀治（〃二二）
辻　義男（〃二四）
安田　辰己（糸一七）
岩切　作次（〃二二）
牧宮　寿雄（〃三二）
石渡　重雄（〃二八）
伊藤　力三（蚕一七）
小沢　安雄（蚕大一）
川上与三郎（〃一五）
北沢　周一（〃一〇）
倉沢　恒夫（〃二一）
国貞　忠男（糸一五）

柴田　正見（蚕三二）
塩原富佐司（蚕大一）
菅原　吉隆（糸三二）
西　孝重（〃　八）
野口　活也（蚕一三）
深井　宏信（化　六）
本間　直人（蚕　一）
丸田　昭男（蚕別三）
向井　致弥（蚕一〇）
森　亮平（〃一七）
山本支之丞（〃一五）
山田　斧一（糸一三）
南波　トリ（旧　教）
浅沼　次雄（紡大二）
長瀬　深見（蚕　五）
岡田　幸一（紡二〇）
上原　安信（糸別二）
倉田　てる（旧　教）
池田正五郎（蚕一一）
横関　源延（〃三〇）
田中　英雄（〃二八）
松野　正一（〃　一）
近藤　正己（〃　三）
滝沢　通（紡一六）
大井　卓雄（蚕二八）
一之瀬　茂（糸二一）
石谷　雄一（蚕三八）
南沢　清（糸九）
鈴木　行徳（糸大一）
志摩　哲夫（糸三一）
石原満洲夫（蚕一一）
清水　良一（〃二五）
小泉　辰雄（糸二〇）
小林小一郎（〃三四）
岩本　賢治（〃二一）
金沢昭三郎（蚕三五）
望月　政明（〃三一）
田沢　四郎（〃三三）
篠原　定雄（〃三四）
古平　義雄（〃二二）
宮下　久吉（〃三二）
中島　正己（〃二八）
土屋　担大（蚕大一）
柳沢　義之（糸三五）

高橋　威（蚕三五）
吉村　公明（糸三二）
宮前　邦雄（蚕一二）
佐藤　三治（糸三四）
鵜野　昭八（〃三五）
花岡　政庫（紡一六）
篠田　鎌一（糸二八）
水野　繁（化　五）
寺沢　清（化大二）
佐藤　雅久（化　三）
小林　正平（〃　）
宮原　家候（〃　五）
宮木　麗治（〃　六）
須田　公三（〃　）
寺島　貞三（〃　八）
中沢　秀（紡二九）
岡村　源一（糸　六）
島倉　督造（〃　九）
小口　宗久（糸三五）
昭和三十一、三十二、三十三三十四年度会費
足立　統三（紡二七）
昭和三十一、三十二、三十三年度会費
滝沢　通（紡一六）
山田　斧一（糸一三）
昭和三十一、三十二年度会費
瀬在袈裟雄（化大一）
昭和三十一年度会費
松尾　昭光（紡二七）
福島鋼治郎（糸一二）
掛川　朝子（教一九）
堀内　米子（〃　）
古川　俊之（蚕一〇）
南波　トリ（旧　教）
浅沼　次雄（紡大二）
田中　英雄（蚕二八）
佐藤良太郎（〃　二）
未納会費納入者
金壱千百円也
芳谷　富雄（蚕二四）
堀　久三郎（糸一四）
吉松　千秋（紡　六）
中川　正（〃一五）

飯塚　孝一（〃二六）
奈須野　正（農　二）
柿田　宝作（蚕一二）
内田訓之亮（〃一三）
久田　雅彦（蚕三五）
林田　義雄（糸二二）
守屋　一郎（蚕二二）
小山田　峻（化　六）
山岸琢治郎（糸二六）
大塚　直人（紡二六）
津野　善衛（蚕一三）
近藤　義信（紡一二）
新井宇之輔（蚕一五）
吉池　正行（糸二四）
太田　正（〃三五）
山田　斧一（〃一三）
岡田　幸一（紡二〇）
松野　正一（蚕　一）
桐本他善男（紡　九）
吉井　鼎（糸一六）
安部　恒雄（紡　二）
酒井　泉（〃二七）
森田　雅雄（化　五）
原田　幹雄（〃　六）
中島　陸男（蚕三〇）
鈴木　敬吾（糸　八）
一之瀬　茂（〃二一）
角田　勝郎（〃二〇）
中村　克己（化　一）
大木　定雄（糸一九）
深井　千晴（化四）
土屋三三夫（糸二四）
川瀬　寛（〃三一）
三宅　玉留（紡四）
志摩　哲夫（糸三一）
浜　正和（〃三六）
早乙女徳蔵（蚕一七）
四方　藤雄（糸一九）
金壱千八拾円也
中沢　哲夫（糸二四）
金壱千円也
土屋　松寿（農　二）
佐藤　良夫（蚕三三）
中村　堯意（紡二六）

井上　一郎（糸　五）
荒井　汪人（蚕三七）
宇都宮　正（化　五）
宮坂美寿雄（糸一六）
高村　八郎（紡二八）
金九百円也
岡　亨四郎（紡一一）
塚田　和麿（糸一五）
関　茂（〃二二）
小口　良人（農　一）
池田正五郎（蚕一一）
横関　源延（〃三〇）
大井　秀夫（〃三六）
金八百円也
永井　俊郎（糸一六）
伊藤　常治（化四）
一木　秀夫（紡二八）
渡辺　末男（蚕三一）
川人　良次（紡二一）
桜井　吉利（蚕　六）
赤瀬　哲（紡二一）
野里　秀直（蚕一七）
橋本　治直（化　九）
六川忠一郎（蚕一八）
中村　英人（紡一九）
一之瀬徳治（〃二一）
堀口　稲三（蚕二四）
高橋　氾一（糸　八）
田中　和徳（蚕三八）
宮沢　勇（〃一三）
荒木　喬（〃二一）
三谷　勝（糸一五）
滋野　文雄（〃一九）
山浦　友樹（蚕三一）
大井　卓雄（〃一八）
水出　通雄（糸二七）
奥村　忠次（蚕二三）
牧　道男（糸二〇）
南沢　清（〃　九）
金七百七拾六円也
小田切昌三（化　三）
金七百拾四円也
柄沢たつを（敎　六）
金七百拾円也

本田　明（敎　三）
金七百円也
小林　清志（糸一七）
丸山　勲（〃二〇）
小松　勝治（〃三一）
桐生　義文（蚕一九）
倉田　てる（旧　敎）
山岸　政治（蚕二二）
金六百八拾円也
田中　種子（旧　敎）
掛川　朝子（敎一九）
堀内　米子（〃　）
金六百七拾円也
小林　清枝（敎　七）
金六百四拾円也
井出　初子（敎一一）
坂場もとゑ（旧　敎）
森　美智子（敎　五）
金六百拾円也
柳沢みや子（旧　敎）
金六百円也
北条五郎右衛門（蚕一七）
小林たきせ（敎　五）
松尾　昭光（紡二七）
竹内　彦保（蚕三二）
小林　一雄（蚕　別）
河辺　謙（紡三〇）
二木　典夫（〃一六）
土屋　邦雄（〃二一）
丸山　十吉（蚕一二）
桜井　弘吉（〃一五）
宮城　長雄（糸一五）
神林　茂（〃三七）
牧野　芳成（〃三七）
宮下　豊次（蚕三〇）
佐々木利為（紡二九）
筒田　義弘（〃二六）
安井　義忠（糸　六）
笠原　重亀（〃一二）
甲本　正道（〃　七）
斎藤　監（〃一六）
岡島　亀治（蚕二二）
南波　トリ（旧　敎）
長瀬　深見（蚕　五）

中村　長章（紡二六）
小平　光雄（糸一三）
滝沢啓四郎（〃一七）
勅使河原保（蚕　八）
太田慎一郎（〃　六）
江口　嘉清（〃三二）
白根　昭典（〃三七）
金五百円也
河合式太郎（糸二三）
森嵩　俊成（紡二六）
細川　豊（蚕一九）
塩見　喜六（糸　三）
小林　進（〃二〇）
尾崎　孜（〃三五）
二森　光雄（〃　）
居鶴　和貞（紡二六）
安田　辰巳（糸一七）
岩瀬とみ子（敎　五）
石井　明（糸別一）
佐藤　暢（農　一）
金四百六拾五円也
福田貴代子（敎　五）
金四百五拾円也
杉本　広助（紡　専）
金四百円也
荻原　万夫（糸大一）
佐藤　安平（蚕大一）
西川　晋（蚕三三）
福島鋼治郎（糸一二）
関口　清登（紡三〇）
根本　剛（糸大一）
鈴木　俊夫（蚕二四）
古川　俊之（〃一〇）
竹内　邦雄（蚕大一）
渡辺　誉重（糸三三）
瀬在袈裟治（化大一）
原　茂（蚕一三）
松井　忠計（糸大一）
足立　統三（紡二七）
原田　正彬（糸二二）
降旗　孝（蚕一五）
今村　覚治（糸二二）
石塚　敏夫（糸三五）
山越　清美（化　四）

鍵谷　伝（蚕　七）
田中　英雄（〃二八）
佐野友一郎（糸三七）
石谷　雄一（蚕三八）
金参百五拾円也
土生　珀二（糸二四）
金参百円也
矢口　茂人（化　七）
井上　大（紡二一）
横沢　平（糸二一）
中山　吉二（蚕一二）
辻　義男（〃二四）
岩切　作次（糸二二）
堀口　友治（蚕二五）
金弐百円也
小泉　郁雄（紡　専）
佐藤　国一（蚕　四）
金崎　真英（〃　九）
五島小太郎（糸一五）
坂　求（紡　九）
白沢　幹（蚕　六）
大井　正夫（糸二〇）
太田　三郎（〃二一）
片山　文一（蚕二九）
桜井　周一（農　一）
佐藤　正（蚕三五）
塩沢　長（蚕大二）
永田　利之（蚕別一）
水谷　宏三（蚕別二）
伊藤　大造（〃　三）
鈴木　正（〃　）
大泉　英明（農　二）
巣山　朔郎（化　七）
米田　俊雄（蚕一〇）
平坂　忠雄（蚕大二）
的場　小六（糸　六）
西井　茂雄（〃二六）
川上　守久（糸大一）
加藤　隆正（紡二一）
山上　三義（紡二二）
岩崎　俊男（化　二）
佐藤　佳良（紡一六）
武田　昭一（化　六）
大久保　実（紡大二）

田村　義隆（化　六）
佐藤　忠男（化　七）
上野　昌彦（化大一）
所　幸直（紡二八）
平野　庄一（〃一六）
加藤　沼二（蚕二四）
工藤　敦男（化　九）
菅沢津多登（蚕三六）
滝沢　幸彦（〃　）
石渡　重夫（糸二八）
伊藤　力三（蚕一七）
小沢　安雄（蚕大一）
川上与三郎（蚕一五）
北沢　周一（〃一〇）
倉沢　恒夫（〃二一）
国貞　忠男（糸一五）
柴田　正見（蚕二二）
塩原富佐司（蚕大一）
菅原　吉隆（糸三二）
西孝　重（〃　八）
野口　浩也（蚕一三）
深井　宏信（化　六）
本間　直人（蚕　一）
丸田　昭男（蚕別三）
向井　敬弥（蚕一〇）
森　亮平（〃一七）
山本友之丞（〃一五）
松崎　滋（糸二九）
大池　登（〃　八）
後藤　政之（紡　二）
太田　正治（糸一二）
荻野　善次（〃一七）
中木　武（〃　）
菅城　忠夫（〃一八）
細井　満（紡一〇）
田口喜一郎（糸一八）
佐久間政志（〃三七）
田中　早苗（〃三八）
山本　和男（〃　）
斎藤　幸夫（糸大一）
近藤　成敏（糸大二）
多川　澄平（〃二四）
浅沼　次雄（紡大二）
久保田昭夫（糸大二）